

911.3
7

句兄弟、
竹の道

句兒弟序



其、精、精、及、及、を、説、せ、よ、よ、う、う、業、
子、句、一、の、類、作、初、古、混、雜、一、と、い、は、り、
こ、ま、じ、く、な、は、謔、し、か、ま、し、れ、な、し、可、り、
一、あ、よ、く、け、な、し、他、志、深、厚、乃、吟、詠、
を、祈、禱、し、る、み、一、点、乃、句、正、哉、何、や、
中、句、他、乃、恠、り、暮、子、何、あ、り、ま、し、
う、一、今、此、高、才、八、秀、逸、な、句、不、三、十、
九、人、を、子、あ、い、し、た、か、し、を、つ、ま、り、
り、了、年、お、り、つ、け、の、ろ、を、し、方、六、あ、り、
子、は、り、せ、り、私、身、及、持、の、二、所、を、と、り、

物免し註解を加へ何事も此後仇沙
 乃將換りの流俗平地い何事も一向
 整ひし馬なる句神なりと申す及此
 とよまし一を寫影の難なるの通照照し
 を志或の地よしのことく平賣人あ人
 女子もと鄙の地よ放る一切字めし
 の邊す一と為るの逸真ありしめんを
 祝、乾の侮ふまゝししは此の終、漸方
 保南、終し、徒、徒一、名、や、法、句、元、等、を
 とちなるあは、ちとさとあまを、昼の、名、と
 一侍る
 元禄七 甲戌 稔事 屋 初五

晋且角

一番 元
 二種ツくはなり花のよしの山 貞室

景

是ツくもをりちるを楊子 晋子

花満山の系を五字り去りてよし野山と
 決定しし所作者の自然地を好する
 下丁を詠得のに孫山ありし花のよしの
 ちよあらしちまちりしと申す初句之是しや
 ちあらしの云下し初及精せしもの難云吉野山
 一句の初解として五字七字すといひあり
 の初をえしちまちと初のちよあらし

本さき平分あはらう 答云句は其奥を同
乃へおや景情のをあやとらるや難談集
り論せばことごとし近くいとも生八年
の星やさらく定あぬ山のつらきも云
句尚をよひさのこ興い感せさうし成芭
蕉翁吉野山平あまつる肘山中は美景
よげねささ古可とをの信を感せし
叙ゆ星の山つらよぬ海よりよけ句のうら
まをえくまよし文通ふりたれる是をこつる言
ふなしとちふ河の満山の花はかひぬま句乃食
あひ也を花の前後を云時聊と句心あやする
くは沈佳期の句を盗む癖とい等類をのこ

違ふ

二番 兄

地主く木の内の花の都

哉

拾穂軒

弟

京中へ地主のさくらや飛胡蝶

老師若言さ句也反轉して市中の蝶を流水の落
花とてんをさくさく木の上と云字けしをぬさ
かりて侍とて成例こころよは如そをのるを飛お
くまやうふさ甲先後の句をさしうや飛花の蝶
母いさる蝶蝶飛来過墙去却疑春色在隣
家他例多く同じ色とも京の一字成心
うらむを難むま

三番 兄

又是よるを素堂一見と ちりきり 素堂

弟

亦是よるを本堂一見の法一也

遊子行 残月ともや夜よおほきし人のまの
を海を惜るん心をうらむけり予の句う
ふひよとわたりて素堂一見とつお花の
うらさびともあしゆへ全く守類あはれとな
りたりと素堂平生口癖あはれは是を格
よ、恥はしほしと云題よそあうつふ花
のち海もえへしけ句を味はかりとひふ下五字
あまがへを強弱の辨をわうつもの也

四番 兄

祐成の袖引のそ珠山と子馬 肅山

弟

山と樹 具物いそし 虎う 伴

袖引のそをせと一衣洗濯の時ふはるるに
高名姉士あつる破 襦袍と着る振
路中 耻さる勇を思ひ合ふるよむ村を
よの友とよそよの志をあのそれし 句よ感
懈ありようそ具物 虎よととたふれし
袖引のそをしほんとあひぶらうそを
夜の川風度とのそよそ追及しと是
各句合意八辨と兄の句の寒しやいふ

字のやうを同し侍連の句の句あり

五番 兄 雨の日や門提く世のさつこ

ほゆ

箒中けふよさけあさ 杜若

杜若雨潤乃一祈時言いささよく云立ふれま
新して白雪中の梅花とさうして周知
躑躅とれい流俗の句中はさうまを一句の
外中作すすしこれを向上の句り於てハ
題と定のけいし心めうあささひ多る中
杜若景物乃一品あまを美むよりを真と
さあへるやる乃杜若と歌ひあさん句作の

我宿り入あさ心り及工して花の葉り
のまじり色をまをを厭ひねさ満と

箒中けふと知しささちり往とあまの二字は

しそ力我わうちささと判読せん人なきな
新し同春の句はさあへつものりく根棘の愚

六番 兄

三絃やせの山我侍月雨 曲水

弟

三味線や侍家よりさ五月雨

五月雨の長閑はるるも流けさるのよと

會も逢込同きあふわさうしはも我を引
お水よかよひを物つちまを思ひよせ
もやそれとるぬきとさうあやふりて
固忍の音よかりも侍る使とく人のみ母
あはれ思ひあし何となく所は福成は
くと思ぬ心色こり侍り儀を忍との
七番 兄 さい使せま
禪寺乃善なり心や浮花を

客あ奇や心成をけい記意

三句句下をく記あり古来は下へ志

花の五字成今あらはありよ云流し
これ花んる庭の礼舞成よせさる毛
吹時代の老僧あとも座所守なるを花
やうく耳立さる句よりは真のまこと

八番 兄 多よよせ

陰惜よ伸之の弟の齡 哉 露沾

秋よあへ伸之の菊散ま 畠

中七字瑞を以てし 菊散昏の惜ま
祿を重んじて霜雪の凋むる懐中刺を
いそぐはつる菊出さるの秋後の菊散よそ
けりん姿と句とくちよ直りおさるの情

九番 兄

光陰を情山と侍と并に
蓬磨忌也 朝日は後の影法師
岩翁

弟

近磨忌也 句利子に在る鏡

論^を俳句如^し論^は禪日乃影と水影美かあし

空房獨^るの似^しも以^てぬ^れ二句一物なり

十番 兄

子凡や夕乃ひさ乃於小舟

弟

ほし川やうはあけりて雲小舟

此舟は古來掉段の秀他をそとに云

たはほも等類乃難非のれそそ是の由也

そて^て没の舟也^は謝多る^は縁^はす^はり^はく^は増^はあ^はず

う^はた^はけ^はく^はて^はし^はも^はは^はく^はは^は先^はの^は句^はと^はた^はて^は

とも^はく^はあ^はく^はて^は舟^は乃^は形容^は沙^はと^は云^は一字^はのは^はと

よも^は反^は精^はせ^はす^はみ^はる^は人^はも^は舟^はと^はて^は懐^は古^は吊^は

十一番 兄

古本はことごとく

登舟上形を檣散より利

杉風

弟

屋形子花んぬ女中出よりり

暮春の至情と舟の檣をくると也し

く^はと^は伝^はし^はよ^はり^はて^は風^は光^はい^はく^は舟^は乃^はう^はり^は

舟人のあそび^は舟^は乃^は海^は草^は上^は野^はと^は向^は

對して渭北春天樹江東日暮時
雲とひふ句
とつらき花見ぬ世中ちりあん後る悔し
つらほしきあひわれいけあはらうしとく
けきとあふあは山水道遠の人共
十二番 兄
よあま

馬のぬき牛の名や比しとく連
杜園

柴のぬき牛のさあうとく遊ぶ

け三句のわいを云とてしとく
閑しゆ色ともむるとく進
年後、柴を斜陽
のこきあふとんしは景といふ年のしつくの室
ぬき牛のさあうとく遊ぶをさへさあまあ

とくさうとくまつとくゆると句の面を兄

十二番 兄
うぬま

うはとゆよと器ぬきと句うな
神叔

弟

埋火ゆるけかけさうらやよ

兄の炉色の用我添て俺との友成りて
したる冬は能くあつた後言を才といふ
焼いまのそと云らん古人乃真を今
俗言よえらして句はらふ句のよはいと
ちぬ柴火三盃乃いみとく
孝冬夜昂事乃反轉

十四番 兄

この村乃あまきうほあきあふるす

古梵

井

あうくともを麻をもんふらんたの曲

窮民哉あまきうほあきあふるす下愚のう
つらき心を用ひてひまあまねるこ乃音もふ
哀れし秋をにじくくもふもねしと悲し
まれば懶農乃至誠あまきうほあきあふるす
起してを歎ききん性と一つおうしけも
のいと憐れもも列子は鴻の心をききみする
事實ををしう一句の先づきをもちぬる

十五番 兄

人先ず醫師乃裕や衣 文

許六

才

は新と鳥の下着や衣 文

二句とも目くらましのり思ひよせし
く自句葺小袖なるも云はくやや勘弁
せりともおののけりあはれをさしを
花なしは新と醫師とのをれうましさを
一もなれも真子やよりあるゆゑも
一列よしとさうり

十六番 兄

浅茅生やうりなはれりての巻

去来

弟

満ぐりよよ松虫さうはは茅や

望をすくもむるを閑し虫のきぬあさち
なほようあしよな 寂蓮翁

迎く虫のしを閑し秋情をうき心を
一句の上よ云流しをほろほしき人湘汎
の岸よこし人よみ新遠近わくそむおれ
ぬれよきけしきちうくそむ各句各意をほ

十七番 兄
海棠乃ちもふハ満きり夜乃月 夕我

海棠花のうつせやおれ月

暁まよも云字成満ると云字は通りて満月
のたしをまふき春真ちり然も一句のこつ

しよ所あま自句よとあて優越は句乃好
あまをさうり趣向とありと一つなれともみち
くす秋のと云る所をうらむ如勝とありと
吟さす時ハ露や煙花や雪よ友のびる境
よ今別はなし先達のいつるあま詞を吟
心伐さすしめ流ふと舎精さのこそくこ

十八番 兄
花魁を川袂にけり 童哉 立圃

弟

花ひらけの秋よ御乳のあま

至愛乃心を作者の功をあらわし二つをそや
しよ詞のあすしうあま所又あま妙句あま

都鄙よいつりそ句き曇云あしおれも十四時
云々々の句句を恥賞せしむらひつらつら
古版の書よ埋め侍所と三丁歎美しそ
古人の深察を再轉せしお乳の人入らぬ
又その物もを童あれを袂よはな童子を
十年をりつらそ類句の難を込ぬへしそ
あはれまきりあつて草もよそと冷ぬれぬ
そゆりんあと塵えつけさうあひのさぬ
思ひやもせを成長をうやむお乳の心とを
手せはめや同情少年春子載不易の句を
本よそを精換すよれを評不はまひらぬ
十九采由 兄

病を人をつら起に食らふ 亀翁

酒をこし蒲団剥く一花の香

冬解百句を三百句まで吟せし時おれも
昂貞の耐寒の心ももつる由あると容を

才番の兄 旨趣うらむ侍所 赤画 妻

いとこねて木兔笑へかやうき原

人情を假て笑をとり作す女乃眞安くけ句を
のこり待宵の若きま程にひきまを人口よある
中人はよ類作の味もあ一人一句よとまひ侍

ハコトヲスルニ人ある心のとこをたねしる道曾路

穴といふ所より止宿しては月やみみおほはら

おきや鶴鳥の羽をまぬ袂を道原へそ

ひめえあや此曉のはとさお原 さとて時を

4-1 写つる物をとんとおれを釣ちあや肌干

またりて書雨本のくさ櫛の木のみらふみほ

とほりて日影をまらふはぬをわくふをた笑ひ

奇り時多のまらふを飛ちうけるとかりと思され

て笑りいふなりそ云は成女をかりか侍りてかた

一つよめをた合へり蜀の魂をいふを新す

う啼血なりを作しこととありよとせしけそ

郭公笑ふといふに私ふはへさし道と和ぶ

おさこのたをけきと書の花のみは細腰を

廿一番 兄

つふふや斗をさぬく相撲取

欣崇

弟

上の下をぬも侵美也すおん

句の裏へけらりこれも句すまふ乃一とある

牛といふ字よふけをふをた立あふ屋

廿二番 兄

人けふけあや六月おせはら

宗因

葦年鳴や六月 木さくさく

杜甫は一字血脈の格ありて意味も字も句と
とそとの格うろちて一句血脈の格をこて人たふ
やい懐感の老妻を古なりけ物あてさる也
ほりたのちうあさおはよあきこて卵も橋も
ふあつてふ初初りのりうしやあさたれて
老をありぬる我を合て老悲の厚意を昂
ぬれを物古の老をちて一向は能信の血脈
此とやへく
あきこてあさおはよあきこて卵も橋も
血脈流連也 同あす人し

木三番 兄

友そのぬきやあつて石二の山

東順

吾より八月やあつてぬ 杜山

亡父三十年前の句也 凡俗うつぬれも古語を
あつて心よりあつてあつて句論り及を守死節を
もすといえたり及なよりいおちてすし書の抄み
よけい入る候の山々 遠心地 信竹りの飛
公子をおけさるる業をやくり 祝よわ統
て業業うけ句り出す人しやあつて西より
木三番 兄 男ひの娘の追善し
はくそを昼圖の英や女の月

ついでに坐のうまや あはれ

新にしと決断せり あはれ ころもいひしとれを
昼間のめんも坐を云字よ入るそとれと坐
のふよりも宜くと句に又先の鼻やあはれ
そとあはれとくまうとあはれ人のあはれも成るに
れとくまうとあはれとあはれとあはれとあはれと
興をとくまうとあはれとあはれとあはれとあはれと作
者よくと沈吟すし

廿二番 元

大佛さしたる花乃盛 か原 僧路通

牙

大仏膝うつむる花乃盛

東照山に花乃盛也池を左にえり 教景詞あり
所を及と心付る花の盛乃も場宜く女山守
のち利しと花を都時よしあはれ掃あつあはれ花の
外よとくまうとあはれとあはれとあはれとあはれと

廿六番 元

大佛さしたる花乃盛 蚊道

身

伊勢志を似せめと徹神なき

一と院都をみねとあはれとあはれとあはれとあはれと
瓢箪早のよきあはれと面白く訊ははれとあはれと
あはれとあはれとあはれとあはれとあはれとあはれと

第一の心はよもひもせん神ありきと心通し
けるそのちけ句聞ゆることばを兼やまきり
しとぬぬ境の思ひふし自句寒杖行の信を記
もつて一川の音声のそよそ物に似たり
めきとれに今やささる句作志移すや俳諧のいさ
と照して邪路城を句と来る人の感とさす

廿七番 兄

ちの酌の心安きと聖子のの花

歌人

弟

ちの涼の風もむのよりの花

尋常の詞よりうもせ字の風俗とさる荷今掛合好所の
子癖也是は別借さしあみすを申句の伎子をもあしと曾
此とのまらにす花のもさす自然なるかきと見を
を新よあはれ花の念ぶく教習を傳ふもさるあ
あまよりあくさるゆを乃わつちや

廿八番 兄

泥坊乃中をよとよ蓮系ふ者

玄札

弟

泥坊泥の影さる乃乃蓮うた

蓮系者蓮葉ををわらさる姿乃ん昔しく目さる
より云はる古来より蓮の字むけに泥の濁さる
よ花よりいさる花をけはる句乃詮を云さる古代の
作者の句のやをばかすは近代の句のやをばかすあり
て心のえさるいさる泥坊の五字の今とて用らる

原まよしと古人の息を捨入りて又竟田いよかけと白波
の紅紫成折し草もくちん方よ一口づも果は平懐新
いむ道の藤持は関侍道いしれすしと物と自由
白作せんとと葉をけむへし

泥坊や花の陰をそほまねるも 菊時乃句肌

廿九番 兄

いぢあまほし

舟梁乃水も流れのあふまふ

女 秋色

す

三十番 花の路や 国乃あ

牛島をいふ波は捨人まきりのかげ同て日言て歸る時

ちいさ舟は乃川今の旅よ月すみき水の面を

曇るあまよるえ来あこり流けまきとをほやけみそ

や云よ船は花を教ぬ方よのちおけれは舟を

しりし油をたれり心也しつ流をたれを国の卵を赤

はぬふい柱は外欄を物まを花の玉珠しよむらむと洞

しりさきいしこ返りあ原三河の筋ねえし

三十番 元

草刈や牛とら流え 女は花

春澄

牙

卅一の娘 伊原十兵衛 女は花

通眼乃馬を引てはつねのまねをよけし京は布の

一匹あしめを云字の所着をちね也新古は論をたきし

何をあそ京田今の新はなすもての君はあまらるよむね

三十番 元 女は花 是等ハ俳諧の

三十一番 元

推原也 来山

早しめやよこれ世々の交斗

并

さゆもやほきゆ形を形をうま

兄 嘗て更書のことのまをたれよまをたれよまをたれよまをたれよ
才 今も物にあそむるをたれよまをたれよまをたれよまをたれよ

三十二番 元

筆持の右根祢ふ子曾

哉

采粟

并

筆持をばしるに別一葉摘式

屏丸の徳と。はれ 染よのまをたれよまをたれよまをたれよ
は度しく同之れよまをたれよまをたれよまをたれよ

守竹をばしるに別一葉摘式
此ひ伝ふの葉つむ大方人のよりころもひもばし
ら糞の色やまうん 君り野遊の酒さへけさ
はくまひ別それと 真あると下部の着けは根なき直

三十三番 元

貞鹿の山句平力な一吹を

并

に子乃山しりし何を孫殿を

都難波のま秋をばしるに別一葉摘式
見物伝ふの無伴獨相来代木下への幽目京をばしる
はよりすふる鳥の終其所はばしるに別一葉摘式

とじさるゝ其場あすしてはるゝよ字也こしの字心
とつげとる句の馴熟いふよまや心所不_レ尽有餘翫
さ寸といやせと句にさ内世を及るき風情を記
浦よりいささるをもとけつるは中_レ信をささるた
とよも耳よ字同よくは寸乃境自然を志す

三十四番 兄

鯛は花いえぬ里とありり月の

西鶴

弟

鯛は江たふさふとてり月

花あ_レ盛よよりて千里の外の心やい一句のそ尾_レ結類
正一申七字_レを如_レて啓蒙期_レ樂_レり_レま_レう_レさ_レき_レと_レ報_レ皮_レに

中_レ生きて佳吉のなま_レと_レ目とあ_レる_レ魚のあ_レる_レけ_レま_レと_レ物
せ_レと_レ景_レ嘆_レ時_レの思_レひ_レ感_レ今_レ懐_レ古_レ 未二年海舟の月
と_レん_レさ_レう_レと_レ云_レお_レん_レれ_レう_レあ_レき_レそ_レい_レ教_レた_レり_レし_レ今_レ故_レ人

二十九番 兄

のつり成ぬ

敦公一_レる_レ鶴_レた_レる_レひ

ひま子

守白

弟

それよりそ 秋の鳥や 思ひ 況

秋_レの_レ社_レや_レと_レ眼_レを_レま_レと_レま_レる_レあ_レと_レい_レ帯_レます_レ
且_レこ_レけ_レ形_レ郭_レ公_レの_レや_レ歌_レね_レも_レ類_レ返_レの_レ貴_レ物_レあ_レま_レて_レ後_レ横
成_レ分_レち_レ侍_レは_レ能_レ諧_レす_レ案_レし_レ今_レは_レ何_レし_レ打_レす_レ此_レ物_レ不_レ鯛
あ_レる_レ心_レを_レか_レま_レと_レさ_レし_レき_レか_レい_レし_レん_レ申_レす_レら_レと_レこ
啼_レく_レ鳥_レり_レい_レか_レり_レ 蕉_レ なる_レや_レ阿_レや_レあ_レと_レ音_レよ_レも_レ郭_レ公_レ角

此種ハ俳諧よりおひへんは^し是等の格法を^はこせん
人を縦横と混雜し^しりとも句法を^もむかへ^か縦^を
花時を月雪桜柳の^はり^を詩号連俳とも^よ通
用の本題を横に^カ家や^ハ入の^まあ^くま^{より}初め^るハ^焼餅
つ^き焼^拂鬼^の^はは^の教^をも^他指^をさ^しふ^もれ^ハ縦^の
題に古詩古歌^ハも^とと^り連^の式^例を^守り^又古
の^カ城^がり^私の^詞あ^く句^の凡^はを^まよ^し横^の題^もを
酒^の原^もい^らも^我思^ふも^自由^なと^はい^ひ論^の
^ハ縦^とい^はぬ^をを^作ら^るの^時も^兼句^せ
ま^あく^まは^任意^なと^もい^はる^に甘^意句^とは^縦横
と^はぬ^をあ^らは^する^に近^く人^の作^らる
二十一番 元 ^{らん}は^あは^ると^後向

月まの^まの^あ桐^の葉^の一^葉 ^一

井^ノの^柳ま^の葉^を桐^ノ葉^とま

此の^先受^の結^をい^はす^にと^恨と^いは^すの^也月^ノ
と^ぬと^他と^を結^して^はる^の柳^をも
誘^いて^ちこ^る凡^のカ^ハら^とり^ある^中七^字乃
五^字を^結句^とし^まぬ^を九^合と^五字^とは^連俳^と
わ^らち^をい^はす^凡ま^ちし^らる^の桐^の葉^乃と^ま
を^二平^連歌^也自^句其^我行^格と^句面^ナカ^を
ら^る井^ノの^柳ま^の葉^を桐^ノ葉^とま^すれ^ハ句^乃筋
三^とは^いぬ^をと^の字^を同^らく^して^見る^ハ
は^我ま^らう^一字^ハ妙^ハ規^の微^を念^しの^也と^又灯

内乃題をとりてやしてふらのえりてて同じし

三十七番元

九合羽くくるるまぐや 不二の山

僧吟市

青漆と雪の袂がまは 九合羽

古代ハ九合羽を打つ婦神にあや云形よりそ中
七字中働んふうのひをほめたる句形あねも續腰の格

二十八番元

ゆるるまはけまのり下は石みそ

轍士

冷酒やともしもつ下の石みそ

百涼味とのぬるは皆苦炎熱我愛夏日長薰風自南東
殿閣生微涼東坡百世の師せして云はこをりあや地は

もつひ平時と絶るふを暑のほはかたき思ひ金くとも
り起すれはさすなつりそよよとひのせし一集の秘

おりの唐を打て辛吟をふくさる返書り及ひぬ花
も根ちる青袖もあり小室ををるさぬ他觀の人を

ト詩と題して御苔を拂ふとさみののみを

三十九番元

あまの流るる後の歯白く岑の月 骨子

骨

塩朝の歯莖とさきく 白の石芭蕉

是アを冬の月とよまよ山猿叫山月落と作らねる
物すこき巴峽の猿よをそ岑の月をりしる也活衣

色を伴りし詩の余情を去るくや奇感のしるし
塩麴の菌のむら出るるも冷しくや思ひよせれり人妻零
の形よんやくちりて老の果年のうねりと並せぬべきを
と魚の店をまじしよは活語の妙をまじり其幽深を
遠く達せし所解のなまをまじりけ句の長の菌を
りよ全せられよはあはれしかうは侍人あ士の菌の
はくし横菌の冷しくもまじり似て似ぬ思ひよりのあ
は成りしまじりよははまじりよは侍人あ士の菌の
て師の句才と分其拙骨をとりし侍師也とこのこと
閑ん侍師自ら評を用ひしし句はどのぶこの後反
轉し横菌の菌白く雲の菌心くし侍師の教
句の二并は侍師人よは侍師の報ゆめあはれし侍師の
骨をとりし其味を好まじり味は雑もり皆をの
まじり煉磨せられし数句はわらわは侍師人を見
たり乃わらわをまじりし

句兄弟中卷

章なりて詠諧乃るをれぬまを物ぬ奇せし雑
詠集なりよりし一肩我みし侍師の句
を自由せよはし侍師の句のこまじり
らに古詩古歌經釈よりし詠子なるまじり
よはれしまじり侍師の句の功なるまじり
下は鼓なりし侍師の句をまじり侍師の鼓
よりし侍師の合意するまじり侍師の文句の

何子...
講物 二十六番

肅由

飛雲我之体...
酒債...
林...
御造...
根...
山...
時...
佐...
花...
父...
記...
子...
教...
事...
月...

晋子
崇山

崇山
晋山
崇山
晋山
崇山

晋山
崇山
晋山
崇山
晋山
崇山
晋山
崇山
晋山
崇山

木好書しむ用ぬ茶をくし款
心つひそまのそま

本賊の身をさうお人新化の時
心つひそまのそま

おふ入りのおましとあまはつを
あこまめくそ

春は酒盛

癸酉八月廿九日乃昼之文葬送の場
乃悲を懐まそ四生乃地かを

一 淋中蝶を木葉おと服

世の孤笑ふそらつる青あそん

迎はすしそ有明乃さけ

福金を思ふぬ氣をく漏出そ

礼者の誇りはよるる空

方名持乃相法

幾世ぬる櫻のま立の難司谷

茶統るよと後ろあまし

山家て遊行の醫者作をあまし

今産御りつんし様の子

曉の声風子と古戦場

石地りのあまし雪程ふ

草穂と藪とららゆる谷のり

藪の間屋に井園

さほひあまし神薬の使のあまし

七ヶヶ物校とそまそまそ

仁似せぬ思我をそまそ

花のぼり日るあましそ

街苔を力よき春切を

目々死耳し死そられの

ま

崇山晋山崇山崇

晋子

東順傳

芭蕉稿

老人東... 校氏... 晋子... 今年七十歳... 花鳥の... 孝子... 大... 金魚... 若... 十... 知... の... 驚... 入月... 行草... 悲... 嗚... 三十四句

行草

三十四句

晋子

ちん... 並... 春... 乞... 氣... 我... 湯... 某... 依... 我... 昔... 芋... 城... 中... の... 細

月十日 俗家、茶女を以て
中子 茶女 俗家 茶女 俗家
岸の 俗家 茶女 俗家 茶女
二つ 俗家 茶女 俗家 茶女
高 俗家 茶女 俗家 茶女
物 俗家 茶女 俗家 茶女
子 俗家 茶女 俗家 茶女
包 俗家 茶女 俗家 茶女
和 俗家 茶女 俗家 茶女

晋 柴 晋 柴 晋 柴
晋 柴 晋 柴 晋 柴
晋 柴 晋 柴 晋 柴
晋 柴 晋 柴 晋 柴

其 俗家 茶女 俗家 茶女
年 俗家 茶女 俗家 茶女
雨 俗家 茶女 俗家 茶女

門 俗家 茶女 俗家 茶女
温 俗家 茶女 俗家 茶女
春 俗家 茶女 俗家 茶女
子 俗家 茶女 俗家 茶女
東 俗家 茶女 俗家 茶女
吹 俗家 茶女 俗家 茶女
病 俗家 茶女 俗家 茶女
其 俗家 茶女 俗家 茶女

春

山灰賣の仕りしる御を 劔を

毛をいしるしと活わつた 雉

と釣と蟹と百つある菜はつる方よりし 雨乃

茶箱初よりせせし恥 唐紙

神の月十年あつた中 唐紙

此は乃鶏とせ茶の湯せん 唐紙

我より位を降りし小 紙

黄鷹此鳥よあまの松よ好 貴

結成の恋より形しし明後る 村木

白雲地の穂をほくぬ下谷 村木

結構な立字よ草をとりけを色 村木

勾者乃多きうを申すはくく 足

七と好くして茶味こゑさ 足

世のうあそ酒のじ服ハ危香川 足

汁咳よ花を殺すは花あ 足

あそ成此乞よ月の當 足

六月八日御食蒸

背教よ不教と見ゆる橋よりか

教くは居る遠 灯を おく

系機邪よ成るをくまうん

煤のゆきを酔て押コル

指指蜂子 指 粟我晋粟我晋我粟晋我 粟晋我粟晋我粟晋我 粟晋我粟晋我粟晋我 粟晋我粟晋我粟晋我 粟晋我粟晋我粟晋我

蒼蒼月既乃額のおおは
川ウの氣残をあれ悲伏松北山
日のさそし蠅の入年冬夜
ひ水と我子りや
暮舎は務をみ
一歩を加賀高人の
面ウの秋りもあれ
濱ウの月をふをす
貴ウな日おの
五ウがうみし
おのいとい

晋指蜂晋指蜂晋指蜂晋指蜂晋指蜂晋指蜂晋指蜂

老ゆを食の中より
送ウき送るえ下添
四月の腋をい
蜂掃ウかりをさ
小舟ゆあ
所ウせもく
梨ウ浦葡萄
扉ウ入下へ
交ウるやう
候ウのつ
弱ウなる
大ウ枚を
菓ウり

晋指蜂晋指蜂晋指蜂晋指蜂晋指蜂晋指蜂晋指蜂

名ヲ

名ヲ

壬申十二月廿日 昇真

井戸をりてむ入探まらんあつてもよ
隙こむすしるをりる宿
目々あつぬけすりあつて引て
ぬ紙のよきはちを繕
夕月のたふけこつふ
出代色こし秋をせり
網と成さぬハひり申す槌の音
肩て中しあふ字箆るさう
足りる菜種を対し 苺のも
茶飲者煮て也の泊瀬北字寮
下張の友あつてさうす
つめい掃乃身とひそめ
むしや襟よさぬ嬬乃白
匠のあつてさうす
匠のあつてさうす

芭蕉 彰崇 晋子 黄山 挑隣 銀杏 崇 晋 杏 蕉 山 隣 崇 晋 蕉

愚心なる和当と友を あきの
言みあつて物を箱戸 極
山をたつておとさうす
袖つうのりる合歡の下周
ふむらひ扱へる床のし
思をぬ舟り登入り沙 待
気ささす曹洞宗乃寒
焦つてさうす
又少の主人又意をさうす
すさる中分々々々
松茸を近江詠るハ 尺山 雁

晋 山 崇 蕉 晋 崇 隣 杏 山 晋 蕉 山 杏 崇 晋 隣 蕉

粉河の鬻 衣りあふ
怪らちの卯 目利笑ふ人
酔へしものつとをさ 城
あひらんや 階子 裁く 月の影
惟 子 けり せし こと なる 秋の言
初 躰 たる 買 氣
世 せり なる 本 場 の 家
何 の 女 成 なる 陰
山 吹 打 なる 三人 の 意

吟 徳 吟 晋 徳 吟 徳 吟 晋 徳 吟

三子三羊 菟をさし 日思ぬ 雨を松とく

雨 脚 日 羊 女 夜 反 意 湖 月

寂 秋 なる 京 昆 布 の 色 紫 紅

寂 摺 も 子 乙 女 あり 月 の 庭 晋 子

此 擗 乃 石 乃 乃 乃 乃 乃 乃 晋 月

下 焚 山 越 白 乃 乃 乃 乃 晋 紅

一 押 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 晋 紅

中 橋 と し ひ ひ 乃 乃 乃 乃 乃 晋 月

秋 の 萩 を 花 乃 乃 乃 乃 乃 晋 紅

鯉 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 晋 月

芝 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 晋 紅

吟 徳 吟 晋 徳 吟 徳 吟 晋 徳 吟

春雨や後々暮石のうほり
 下着をききし百あふ脱
 半切の女の毛を紙巻をもむ
 をはく醒まし誤つて一面
 ありくと追跡舟り糸い
 一向宗乃南无阿弥陀佛
 借素袍家よおし姿を
 法後歩免の標はく門
 切派治を時よ受申る部云
 様子の成みまき妻常れ
 十八すまふりよとぬむ
 木曾木つる月の川音
 百姓の位こまお子の秋
 お行治事の人乃世中
 宿しをふりて再会し

一七月廿五日 旅は川 栄夢院

紅晋月 紅晋月 紅晋月 紅晋月

嵐聖

つらり舟の糸をゆるは秋のゆ
 雨りおろけおるる虫
 初鞋やうのそり前宿あ
 忘れ多抱て蘇鉄の塩を
 とつたはを又いふ
 さいやうを先ぬ
 盡の場を
 つくも女中をり
 道程おとろく曉のゆ先
 芭蕉果は春のうらるる
 薄く男描け方を妻
 縁づも女衣氷る袖の角

神叔 晋子 晋叔 晋叔 晋叔 晋叔 晋叔

花の交聖天町

月雪了寸切

三儀河

大音の可幅

一室空焚

付系成

志己

之

恥

下市赤

心歌

下

初

匡

世

紅

紅

紅

晋

我叔

晋

我叔

晋

我叔

晋

我叔

晋

我叔

晋

我叔

晋

我叔

晋

我叔

晋

我叔

四十より一葉のつやなまよ玉模 菊
 満ちるにけしよハ爵を 恋やこ
 うりしきも初 柱ハ古よ 清きりり
 冬 借をともとてあさくさあ 神
 糸 積を物とあさす 油 標
 尾 結を伴 鏡を十ちの作
 山 柿乃 竹よあをさるん 夕の月
 旁よさきハ 清く一葉乃 昔 垢
 打 花 残ららくくめをこよ 包をさ
 四 奈く 四 買し けす 枝
 彼 岸 中よさ 洞 妙 ちり
 楓 じ 笑 の ち ち 朝
 米 採 の 古 ち ち ち ち ち
 炭 舟 ち ち ち ち ち ち ち
 随 縁 糸 行 甲 戌 仲 秋

花色紅晋色花玉之晋玉花晋紅色

本世を... 晋子

石山寺よ 移く 柳 ち ち ち ち ち
 廣 沃 を ち ち ち ち ち ち ち
 出 ち ち ち ち ち ち ち
 旅 ち ち ち ち ち ち ち
 道 途 ち ち ち ち ち ち ち
 九月六日とちりし
 江 戸 を ち ち ち ち ち ち ち
 送 ち ち ち ち ち ち ち
 彼 柳 吟 ち
 岩 翁
 亀 翁
 草 枕 稻 干 繩 の 一 一 一 一 一
 横 儿
 秋 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 村 松
 晋 子

三過之旅行の重現
門前 門前 門前 門前 門前
鳥籠 鳥籠 鳥籠 鳥籠 鳥籠
鳥籠 鳥籠 鳥籠 鳥籠 鳥籠
鳥籠 鳥籠 鳥籠 鳥籠 鳥籠

晋子
岩翁
尺草
龜翁

原回頭
西土之常雪水面
富士川渡航
不空也坐赤蜻蛉の如き

晋子
龜翁
横儿

清見
安子乃塩也
安子乃塩也
安子乃塩也
安子乃塩也

岩翁
尺草
尺中

袖之
小袖の襦
御所様
之方
佐夜
年註
在私
及後
吉百

龜翁
横儿
尺中
晋子

山
山
山
山
山
山
山
山
山
山

尺中
龜翁
晋子

珠の
合羽
四十
既
花

尺中
晋子
尺中
横儿

尺中
横儿

杖の禪定下山の時

杖の禪定下山の時
かゝる杖を投する

糸系
晋子

山風や

岩翁

乃境湍巻る也

掛几

大切所とよま

松翁

二役門推河脇の所社を切所と

打擡り

晋子

測や

亀翁

我笑や

尺中

十二叔濱松

内玄園家をの

亀翁

十三物出る

岩翁

味方

尺中

乃乃

晋子

熱田奉幣

芭蕉翁甲子の歌あり

地を

は

の

を

を

を

文

晋子

の

亀翁

ま

岩翁

津嶋

天王

縁乃猶亦其亦... (Handwritten Japanese text)

龜翁

... (Handwritten Japanese text)

撫子

... (Handwritten Japanese text)

龜翁

... (Handwritten Japanese text)

撫子

... (Handwritten Japanese text)

撫子

... (Handwritten Japanese text)

晉子

... (Handwritten Japanese text)

可

... (Handwritten Japanese text)

龜翁

... (Handwritten Japanese text)

撫子

... (Handwritten Japanese text)

撫子

... (Handwritten Japanese text)

晉子

... (Handwritten Japanese text)

撫子

... (Handwritten Japanese text)

岩翁

... (Handwritten Japanese text)

龜翁

... (Handwritten Japanese text)

撫子

... (Handwritten Japanese text)

撫子

... (Handwritten Japanese text)

晉子

... (Handwritten Japanese text)

晉子

... (Handwritten Japanese text)

龜翁

... (Handwritten Japanese text)

岩翁

... (Handwritten Japanese text)

龜翁

... (Handwritten Japanese text)

晉子

... (Handwritten Japanese text)

撫子

... (Handwritten Japanese text)

撫子

卷之三

尺中

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

大和栴檀...
 法...
 日...
 光明皇后...
 大佛...
 此...
 小...
 意...
 上...
 神...

晋子
 松羽
 晋子
 晋子
 尺子
 晋子
 晋子
 晋子
 晋子

持...
 二...
 下...
 中...
 此...
 神...
 了...
 僧...
 春...
 御...
 信...

晋子
 龟翁
 同
 尺子
 晋子
 尺子
 晋子
 晋子
 晋子
 晋子

山く陰少じ乃く河繩 栞 横儿

ねみ石乃やをのさやしよの 栞 松前

二月廿七 飯食地切首有屏凡引廻り人声

つらぬきよ捨ぬきをくくくく 外横儿

北谷吉野山山流言や冬よ重樹の谷をくくく
山流の象はくくく西くくく代音東よひま院

との鐘乃声心の底くくく寒を續般やを句思をく

言え乃城の寒さくくく のや 晋子

日さくくくやせくくくくく のよの 横儿

ちの海や言はえん白く 冬 栞

分ありくくくく 真の時 尺中

世にさくくくくくくくくくくくくくくくくく

横儿乃月乃所や九月を 晋子

西のののののの

三人の身乃くくくく 同 亀翁

あうまや何と目きぬはくくく 同 亀翁

十月さくくくくくくくくくくくく

小の月さくくくくく 岩羽

あきんとの物乃寒く 尺中

院くくくくくくく 後 亀翁

くくくくくくくくくくくく

あをくくくくくくくく 同 横儿

サのけ山あみや 田子

卵塔のものを辰やけを神を月 晋子

學の文流乃宿りくく

くくくくくくくくく 尺中

紀の川乃流もありくく月もくくく

あつらり方をつく和や三日此月 晋子

新島の形をばらめたる時多分

亀翁

和歌の吹上

舟を渡りて十名入る下流なる

岩翁

舟の波紀を尋るるなりと云ふ

尺中

王津の波を尋るるなりと云ふ

亀翁

舟を渡りて十名入る下流なる

音子

和歌の吹上

同

舟を渡りて十名入る下流なる

亀翁

舟を渡りて十名入る下流なる

横儿

舟を渡りて十名入る下流なる

松翁

舟を渡りて十名入る下流なる

尺中

舟を渡りて十名入る下流なる

岩翁

舟を渡りて十名入る下流なる

尺中

舟を渡りて十名入る下流なる

音子

舟を渡りて十名入る下流なる

横儿

舟を渡りて十名入る下流なる

尺中

舟を渡りて十名入る下流なる

音子

此一帖者亀翁旅泊之日記也初之遠

遊之志故重父子之行合朋友之親六祀
 神社為敬禮律閑者禮既生
 至之悲惟成不巧京落既遊
 所至之悲惟成不巧京落既遊
 間所至之悲惟成不巧京落既遊
 隨記以不負句元弟集後

句元弟追考六格

○律句

新舊有已物丹の縁
 月有部の心
 下女の清出
 此の心
 一

豊翠
 柴抄
 菘根
 几手
 棧
 山
 蜂

物の心
 衆情
 舎
 雅
 神
 所
 望
 有
 通
 之
 考

為有
 恩濱
 巴沙
 許六
 野杜
 山
 梅
 岸
 山
 子

筆文の竹の影を

○偉句

懺悔の文を所

新極の文を所

美妙の文を所

舟旅の文を所

府徳の文を所

坊子の文を所

有向の文を所

卯酒の文を所

人心の文を所

里の文を所

牙の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

可解の文を所

氷花

銀行

銀香

風

思

木

花

双

演

風

周

指

山

暮

秋

思

演

子

松

吟

葛

雲

又

秋

角

上

今

找

干

翠

袖

那

去

来

堤

亭

正

秀

嵐

雪

安

影

之

景

大

雪

正

秀

嵐

雪

安

影

之

景

大

雪

教を根えんをけり
時と引板屋よかきり
藪貫ふ使よやくり
川波や千をかりほる舟乃
山さくらり小野へあさり
あさりこま權のまや笠の
拉あまの早苗は蘭田の
去の那や木瓜の蕊乃
紫毛や老を二をまよ
石川や葉のつめのは
涼みや麻の束を
白魚やみりかきり
尾の星乃こりり
石竹の後やうらほふ
舞のりこりり
洞門の海をまきり

晨鐘 秋色 黄山 瞻羅 野風 一拙 荏荏 治德 一拙 荏荏 紫弘 拙山 素山 野風 山川 一雀

いほり年をまきり
いほり年をまきり
名目なほりり
詠入る家教り
連乃まや衣裳よ
寐の家灯籠長月
富士乃

彫棠 思演 角上 柳玉 虎琴 未陌 松吟

日比志る門をり
病中吟
長髪やほりり
まきり海一ま
あき房やかきり
若きやあきの影
川越や蚕り
涼る我り

今我 山川 一拙 野風

前巻て牛入るまほひの草蒲草
うつく日と襟よふくくる團汁
娘似や物思ひなま稚い衣
あちさあやと鳥とぬる山つふ

四羈中

牧あつさるををねたる女うま
舟縋り先小舟はなをせむ
みささちるの畔とあさく刈穂るま

豪句

六月や峯よきやあし一や梅
むじしこさ千川の鮎乃今下りな
卯の毛は昔毛入るは秋明り名
山鳥の毛は入るくすや秋乃ま
ふみさるうらな柳うま
すしさを舞舞のよぬい

母の墓

家秋やしらをねく荷のあ
物秋修秋の寝つまや昆ふま
一ゆめ乳の毛ア命ノ人あ
卯の毛のや井筒の雪は油のあ
秋を越し蘭の御ある句
昼秋や暑い盛も花の
三十一乃あ乃おとや
氣秋とさる人いとと山さ
わさし舟船在具あさ
宿所の水もあれし
老人乃孫のうはま
うさるあををさか
あさる乃目やさるもさ
砂さあすさるあ
貝さるを乃さるあ
應さるをを敲くや雪乃門

一境
思演
赤水
野梅

拙小
庐牧
杉風

芭蕉
湖夕
許六
曲翠
野梅
湖風

秋色
松吟
湖風
其詞
口遊
含棘
撒土
寒玉
白盆
郎棠
神放
泥足
介我
郎棠
去来

人とらへく待事され而もある人の言をききき水よのそ
とけしん八眼前に寝い出妙を揮ふ心こ乃等一
かゝるを句乃とすくはれをらんはれはけぬる
又その中よひろを母と称ふるものいせく月よんを
暇求りんとれを俯し多拾ひする人よ行きぬるこを
一は是よ原詩本歌乃要をとんせく背設ひ
て曰彷彿ふらふら子歌一皮飛ひといふを彷彿ふらふら小童こどもし
葉飛はといひ天徹てんてつ林下何者見一人といふはよ
王右丞わうえいじやうの尋幽得じゆんゆうとく此地誰一人このち句中
の采長さいちやうあり一場所いの安やすゆる一又さよ又
ふまに訂ちやうやとるくををさうりけし雲の浦
舟とあまの心こころをなはらん新波しんぱるよ梨水
く出る思しの月つきのあはれつものよはるも皆是人
新詞しんじ成句じやうごに教しやうるし風神ふうしんとていふも
又左石さし友干ゆうかんの何なにあるよはさ回まわのしきはよとりかゝる
よ小舟こぶねぶらう鏡かがみいと清しみるを叙しやう業ごうよれ奇きと物もの
中ちゆうにゆみの曲まがりかふ境さかいをさへさ事こと句乃鏡かがみ
横傾よこかた倒たふ自得じよくとくのうへあはれ物ものをさへし
さあよこそ節ふしうをさへた女おんなゆき中ちゆうお乃の後ご子こ晋しん子こ
三十九人の連枝れんしこそんをとりさう句ごうをむさへし
す乃の一いつ理りぬるをらんをけあはれとてほあ
て活誌かつし記き

俳諧 竹之道序

先師蕉翁ハ生涯凡ゆるの道なりとされ
之ヲ奥羽ノ枝ヲ荷ヒ水鏡ノ書ニ笠成はし
いづれ波乃佐渡よよこみい本を也よし
聖典若 秋より白を又雪より白を
ハ泉北よりくくく終るがごとく是等の人志
知るべきは道も酒厚の如くありあはれ神
のいさえを以て又の道も此衰病より起る
られしををいさるるありと折く道は

志の心も人の心も同じなりとて風土の好悪も
兼て思ふべき事なりとて(其の心も)
人の心も金銀に換はるべき事なりとて津之
邊に是れ思ふべき事なりとて其の心も
之れ其の心も其の心も其の心も其の心も
其の心も其の心も其の心も其の心も其の心も
其の心も其の心も其の心も其の心も其の心も
其の心も其の心も其の心も其の心も其の心も
其の心も其の心も其の心も其の心も其の心も
其の心も其の心も其の心も其の心も其の心も
其の心も其の心も其の心も其の心も其の心も

深川の雨の日の如く也一(其の心も)

元禄十二年卯月

藤抄野坡旅人記

芭蕉翁

玉雨平花並のま 料のり
春雨平つら蕉平 芭蕉翁
山道の虎の如く候之 玉の百
玉の如く花の如く候之 料のり
蕉の如く花の如く候之 料のり

野坡
些棠
抄柳
高麻

冬乃部

些采

商人比溪の従事やーまの如
 その木立乃うきみかこし
 むいしき 篠子 和琴のこつて
 小笠志封成ふとくまひ
 石くのぬきもつては 月の雨
 なます乃うこのやぬ 朔日
 二三友とまはれぬと見あて
 山より風成るも 逆敷
 光立夜半の星の六つとこ
 波合せおく 雪籠の枠組
 病人乃うこしは 二を安

柳 棠 涼 席 瓜 埧 整 坡 紗 柳

あまのこまのうく 又若狭
 昏さしに雨とをまて 夏の月
 茶師の影く 出来ぬ大日
 逢ふ河乃 踏くは 成とまあ
 ほろく 碎て 染く ぬく
 あいし 風志やみさる 今更そ
 廣く 怪しき 家のこしはく
 押さる 下志如 緒のこしはく
 毛蓑多乃 花の今盛る
 伏志音 舞あしをぬき 打くる
 人々 集まる こと 志
 俺 云々 ぬき ぬき ぬき

棠 柳 坡 埧 席 棠 柳 坡 埧

あはれ神よまき事ありし
垣抄よく紙も通るぬまの跡
た紙ほもあはれ松物語の由
あひ賣新酒のまきとまきと
あつとまきとつとつとつとつと
長持乃蓋ぬあゝ 秋の風
山乃杖のかしこ海へなる
い川花にちり枯るる 庭なる
泣て一子立ちつとつと
海陸はあはれありなる國の昔
泣ぬ祭よもあはれ海に
八重一重のこゝぬ巻の 盛ぬ

あはれとまきとつとつとつと

床 塙 塙 塙 柳 棠 床 塙 塙 柳 棠 床

冬乃部 要

草兵と蒲固て行く 雪雉
も川魚六餅に造るく進せをせ
余の子母をもちに 雪は朝
物も如神乃料理の匠祢々袖
志ね夜より向てんぬ 雪の朝
子ともらひそくあやけきの雪

神皇の初越うすまきと

今あつと祢雲とまきとつとつと

其角 野服 雪後 雪風 雪棠 蕪英

正秀

前此作りの終と末なる人なりとたまひつれと

筆の葉乃今を教りくさるるのこ
う湯やあれおのび浪しら

野坡 卯七

後への記

時あしき川はれをめて神を成り
志くも世に身は相りかきそ
栗ぬのころまらぬ
白きや志くれし
葉昌や行儀崩れく初まれ
あもくそあつはくはくまくれ成

夏米 糸後 紗柳 卯七 野坡 紗柳

題うら

心より長く人の代までを成
妻の女子との世にむすむ
行くまく柳をさむし神を月

出芳 宇麻 芳采

甲斐の山中にありし

指とあもれくゆり死らこの那
かひの記也 遠出のまらりし
すもまや船をが海にのあもれを
はるま指しかりやぬほらり希子
葉葉のこいも成人か撰せしや
日のあもれしと斗れしあもれ
あもれや又あもれしと斗れし
か越の指れしと斗れし

正秀 許六 陀方 望采 羊弦 智月 之通 越人

尼

歳暮

あ風呂に吸物をうけ暮暮
州の戸銭叩くあてあやみのくれ
塩菰乃ちしん中あやみの書
う池と取付く市や 葉の夢

長湯の浦り縁のきり年

う浪のくまの行や 星の下

旅館

うしんふ人平はきり暮の書

春乃部 花機

見いせぬさりくたよす花盛

うふとくちのまきく花ん成
波一橋のむらとん花 盛
氣道のことしをあさり 花の心
一橋川のくたのさかしく
かいらの機をきんのみとん成
白妙は月夜かきは花のあく
西入日ひよ里たしあや山さく
石形中腰しや拵よさく
青きりかきしんまき 機部
是とんくちんあや山極

信 陀方

砂大

曾米

紗柳

去来

去来

聖坡

聖坡

助豊

紗柳

机堤

宇麻

浪化

大州

些栄

菘英

聖坡

聖坡

些栄

うつくしすの身初を竹のあなすか
愛もや星初初を竹のあなすか
うつくしすの身初を竹のあなすか
鶯のうたを初初を竹のあなすか
うつくしすの身初を竹のあなすか
歎たり娘容を初初を竹のあなすか
山梅初初を竹のあなすか
子石千雲雀四立羽初初を竹のあなすか
麦の葉に力初初を竹のあなすか
初魚初初の中北初子の声
初梅初初を竹のあなすか

題

葉の芽に土のうはく陸月
出の芽に土のうはく陸月
お替や陸月初のつまき
初梅初初を竹のあなすか
土のうはく陸月
さうつきまきを竹のあなすか

合点して産後に出るひ干か
春の葉
世つきの初とたつひ
竹のあなすか

世葉
初梅
風回
尚白
智月
初柳
支考
世葉
若菜
元川

初梅
初梅
初梅
初梅
初梅
初梅
初梅
初梅
初梅
初梅

野に
若菜
周友

秦納

五込て梅乃香よさま 松柏

兼且

ちるりていさなりいふさむのま
初を小波して星の 為光り
蓮葉波え知して奥の房中
元日おを成る侍ふ 梅様
いさよ女と蓮葉の裏葉の初露

夏乃部

昂具

水坡

いさよささく涼やほしめあ

楳田の取とりのもせお

生物て濱ををんぬ出

怪と旅と何二十石とり

五羽の物と風た吹り

山り麻乃後ろ祢らむく

け袖とこり越くは 方 髪

そま切るとく女中立

音後もこのふ代代 奇福

あはれりいひり八重の内

障子後丸たふ 念点ふそ

楊屋の徳徳百目をいし

いさ

去来

登坡

紗柳

字麻

奇後

山草

字麻

紗柳

血境

坡

棠

堤

柳

棠

堤

麻

昔くは能く食飲まきし人
 盃中うらうてみよと上下
 け月と誰かをもえせぬあらしま
 日川の竹舟あや乃もつ
 待花よりあそむの道多悦
 余所の且形乃氣死を中
 王生念佛並に笑ゆる中二階
 ちり屋くむとあつる石書
 さるまの妹く姉のせもあはま
 あまこは山のふもとに
 橙の花面白く 落と風
 あしき人めこころよれ

柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠

浩構る伯父子のけくはあて
 云庫の船のちる川口
 菜の脇へ蒔乃物を引ひ移け
 こころの梨のこころをちり花
 け空のぬきま時て後の月
 舟口やまゆけかきあはれ
 法人の理屈吐しのらんら
 煮炙るをれと味乃乃吸物
 推挫れるく花の咲くま
 雲雀にえ乃めふ昔雲
 二月や涼生の人のをくせ
 月平立の草たすこれらん

柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠 柳 棠

夏乃部

あけの國の元 時を
おもしろそなたさしく 時を

玄来
陀方

子紀さきの垣際にしんりのり
花らし里たれおふ

水坂

心よ川流く思ふもすらぬや 河を
許さくやとむきまのれ一時を

吾子
瓜堤

夜とまに申おえさる二子山

高橋

ふしきの花と小川の水の音

山草

卯の花や納戸の内をふさうつ花

瓜堤

うの花やうし紙を産きぬ島
黒椀の椀母のや 杜あり

高名
祖列

すき通と星のうまや夏あま
押合く算とのとくありあま

若菜

えよあらのほろろ給と逢くらうらま
元中つらぬ給ありまも祝ひ

水坂

えよあとののめなしく給
白あれこわくをや 夜文

水坂
高橋

六月雨や海見や

吾子

積英亭真弓の附

古自子... 松栢
何之乃... 松栢
妻... 松栢
看... 松栢
溝... 松栢
吉... 松栢

松栢
松栢
松栢
松栢
松栢
松栢

望心亭 六月七日松栢

及... 松栢
亂... 松栢
白... 松栢
地... 松栢

松栢
松栢
松栢
松栢

蓮... 松栢

松栢

秋乃部

鹹... 松栢
去... 松栢
看... 松栢
看... 松栢
也... 松栢
名... 松栢
名... 松栢
于... 松栢
心... 松栢

松栢
松栢
松栢
松栢
松栢
松栢
松栢
松栢
松栢

掛物のあつらひは後さ月よ

紗柳

掛物

とほしとんちの箱乃えり代
朝風や子宿吹のほる 八幡山
粟の穂とあそと通や唐月歌
袖乃すね白ひと菊のさうり
子乃身に及ぬとや夜すき
とれやとさ萩のうまやともの花
三日月の夜めとれ 葉の巻
瓢箪乃竹端母はのる日あ

宇麻
山流
紗柳
素新
瓜堤
若来
為有

荒波母心しそとんちの夜
せりしと首りてや麻の声
小男麻乃麻あそとさやまの光
元迎氏兔の代や桃ひと

此葉
聖坡
子後
全

雜 題うら

電のさそひ出しとや 大とら虫
さりらたなや虫さの膝の下
たさりくる皆すそと秋の雨
八朔や秋とあそと風三ノの音
吾身中母うらや寄る所をさ
荒川海の秋をささりゆ月れ穂

丈牝
同
野坡
子川
瓜堤
素新

秋風や 水鏡飛く所 浪のと
露ののた松のちうめと 浦の秋
家の皆病者もぬくて 子宿の也
あきの夜のつらさし 多き日和

曾米
此心
杜年
世榮

撰者

西田 宇麻
村田 紗柳

宇麻紗柳といへる長崎乃浦に有珠と
女子は紙すりみうは 野坡子乃力こ 予も
ことと 此母旅のこころ 侍ふるを 侍ふるを

今月の光を世ふあつた ぬかひ中乃道乃集也
野坡のゆり 曰葉のたに 実をゆく 花よきな
し 了なきの後の 撰りん ありあつたといふ
さるぬの けりま 入たのこころ 賞し 侍ふるを

洛外去來跋

人



州乃道終

